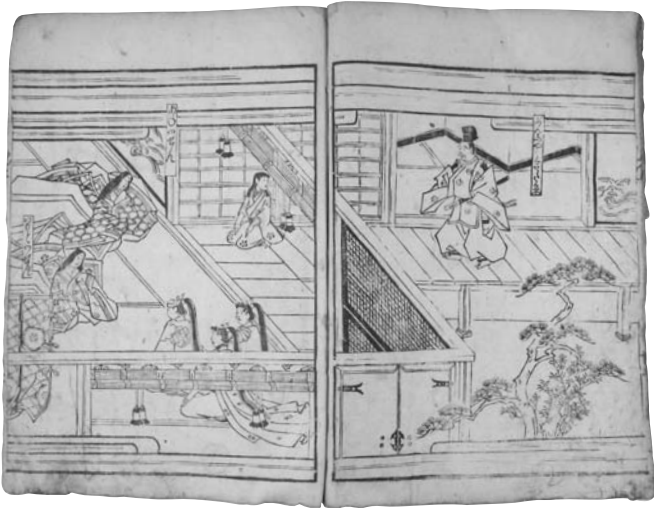


榎戸龍蔵院の蔵書と村人の読書

横山氏の書き込みのある「ぶんしやう物語」(寛文11年刊)



江戸時代の只見町域では、その当時流通していた刊本が購入されたり、書籍を借りて写本が作られたりして、読書が行われていたことが明らかになっていきます(『只見町史』第一巻通史編1「書籍の流入と文化」)。江戸時代の書籍を持ち伝えた家の例

として、医家であった原田拓夫家(黒谷)に64冊、修験(法印)吉祥院であった五十嵐英家(只見)に54冊の書籍が所蔵されています。ほかに、只見ダム建設により水没した石伏集落には、38点85冊の江戸時代の書籍がありました。それらに比べると、榎戸の修験龍蔵院であった山崎行

弘家に伝存されてきた書籍の数は208点であり、多量です。書籍は文書と違って家や個人に關らないし、多量だと保管が厄介であるために、処分されることが多かったのです。龍蔵院の蔵書量を、他の修験寺院に押し広げて考えると、只見町の各集落には多くの書籍が存在したことが推測されます。

書籍の書き込みに見る村人

龍蔵院の書籍には、村人と書籍との関わりがうかがえる書き込みが見られます。『ぶんしやう(文章)物語』(寛文十一年(一六七二)松会版)には、「よこやまうし」(横山氏)とあり、『懺悔物語』(刊年未詳)には、「よこやまうし」「文政九六月吉日 小川恵助」「会津伊北小川恵助」と書き込まれています。これらの「よこやまうし」は同筆であり、榎戸の横山氏が所蔵していた書籍であったことがわかります。『庭訓往来』(書写年未詳)には、「メシ ナラ戸邑 左京進」主

榎戸邑 本山 左京の書き込みが先に書かれ、後に「榎戸村横山久作(中略)榎戸村久作より直治(中略)横山氏」と書き込まれています。『万用子供之手遊』(天保三年(一八三二)書写)には、「会津御蔵入伊北黒谷組榎戸村横山門十郎 織之助」と書き込みがあります。この2点は寺子屋の手習い教科書であり、左京は龍蔵院の法印行鶴(一七六九〜一八四二)です。法印が榎戸村の横山久作・直治に書き与えたものや、横山門十郎・織之助が学んだ手習い本が残されたのでしよう。

村人は龍蔵院との間で書籍を貸し借りしたり、譲り譲られたりして、書物を介した交流がありました。仏教談義書の『諸宗宝鑑』(刊年未詳)には、「会津南山榎戸邑横山多蔵」「七くわんうち 横山多蔵 残り三くわん 法印二有」と書き込みがあります。7巻のうちの4巻は横山多蔵、残り3巻は龍蔵院の所にあつたというわけです。神道書の『追考中臣祓瑞穂鈔』(万治二年(一六五九)刊)には、龍蔵院がこの本を所望したので、和泉田

村の弥左衛門が寄贈するという内容の書簡がはさんであります。

村人が法印に書籍の購入を依頼することもありました。医師と考えられる宗簡という人物が、龍蔵院の法印が本山修行のため京都に行つた時に、鍼灸の針と『医事或問』(医学書、吉益東洞著、明和六年(一七六九)刊)を買つてきてほしいと依頼する書簡(年未詳)もあります。法印行鶴は、京都に行つた時に買った書籍である『咩字義』(仏教書、刊年未詳)に、「京都寺町通ニテ

求之 乾林堂持用」と記し、『役小角靈驗記』(享保六年(一七二一)刊、五十嵐英家蔵)には、「寛政六年寅三月 京都六角堂前ニ而求之 法印行鶴」と記しています。乾林堂は行鶴の雅号です。彼は26歳の寛政六年(一七九四)三月に、京都から紀州(和歌山県)葛城まで旅をしています。このように、龍蔵院には多くの蔵書があり、寺子屋として手習いが行われていました。「読み」が書室のある村の学舎であったのです。